

三詩型事始め

第1回

森川雅美

「詩歌梁山泊」を始めてほぼ15年になり、その足跡を少し振り返ってみる。これは何度も書いたことだが、「詩歌梁山泊」の始まりは、2010年10月16日（土）に神楽坂の旧出版クラブ会館で開催した、第1回シンポジウムであり、WEBマガジン「詩客」の創刊のほぼ半年前。このシンポジウムに先立ち、8月から月1回、4回の準備委員会が開かれたが、その様子を紹介する。決して順調に進んだのではなく、わずかな間にも新しく入る者、短時間で去っていく者があった。その内容を読むと、「詩歌梁山泊」「詩客」の創始には私個人の力ではなく、いかに多くの人たちの協力があったか分かると思う。

第1回の準備委員会は6月27日（日）午後2時より、新宿の珈琲茶館「集」で行われた。参加者は、後に実行委員として大いに協力いただく、俳句は筑紫磐井、高山れおな、自由詩は野村喜和夫、岡野絵里子、渡辺めぐみ、他に短歌俳句にシンポジウム前に辞退した各一人がいたが、短歌が弱いのが分かる。高山は筑紫の紹介であり、詩歌梁山泊の創刊における俳句関係は、筑紫がいなければ成り立たなかった。話された内容は今後の参加者について、シンポジウムについて、後に「詩客」となるWEBページについての3点。今後の参加者はそれぞれが推薦を出し、この時筑紫が推薦した短歌の藤原龍一郎が、初期「詩客」短歌の中心となる。

シンポジウムについてはパネラーのほか、内容についていくつかの意見が出た。構成は3部、1部は当時の中堅、2部は新鋭がパネラー、3部は懇親会として話される。内容については以下の当時タイムリーな、三詩型合同ならではの提案があり、後に第1回シンポジウムに生かされる。「第二藝術論の問題」「死刑囚がなぜ定型を選ぶか」「各詩形に於ける私性」「律と作品の意味性」WEBマガジンに関しては、内容について様々な意見が交わされ、これらは初期「詩客」にほぼ生かされる。基本は短歌、俳句、自由詩三詩型の作品と時評を中心とし、以下が話された詳細。毎月各詩型作品各5人くらい、時評は各詩型毎月2から3人とし、一人隔月か3ヶ月の連載、ほか書評など。それとは別に三詩型共同連作（三詩型融合作品）を、頻度は未定だが掲載する。これは「詩歌トライアスロン」や「三詩型連作」に繋がる。現在と違い三詩型ともほぼ毎週更新という内容であり、人材も豊富であったため、実際に初期「詩客」では、このスペースを保ち、さらに過去のよく知られる作品や作者の紹介も、毎日更新された。

このように「詩歌梁山泊」は多難な一歩を踏み出したのである。